

ジョクジャカルタにて

土 屋 健 治*

ジャカルタ＝スラバヤ間を1日1回連絡している寝台急行のビーマ (Bima) 号に乗って午後3時30分にジャカルタ中央駅を出発すると、このディーゼル機関車はジャワ島北海岸をチェリボンまで走ってから南下し、ジョクジャカルタ及びスラカルタ (ソロ) の二つの代表的な中部ジャワの都市を経由して、翌朝8時半頃スラバヤへ到着する。私がこのビーマ号に乗って、はじめてジョクジャカルタ駅に降り立ったのは、1968年11月30日の払暁、午前3時過ぎであった。以来3カ月余り、ジョクジャカルタでの生活を送ってきたが、町の印象と大学の様子について、狭い見聞であり雑駁ではあるが、以下に若干記してみたい。

ジョクジャカルタ市の印象

ジョクジャカルタ (Jogjakarta) は、この国の人々によって「歴史の都」(Kota Sedjarah) 「学術の府」(Kota Beladjar) と名付けられるにふさわしく、しっとりと落ち着いた町である。町は、マタラム王朝 (Mataram) の宮殿 (クラトン=Kraton) を中心に、ほぼ正方形に広がっている。クラトンからまっすぐ北へ伸びているマリオボロ大通り (Malio-

boro) は、商店街、官庁街の中心でこの町の唯一の目抜き通りであり、ジョクジャカルタとソロとを結ぶ街道、ソロ街道の北側地域と、ソロ街道と平行して走っている鉄道とこの街道にはさまれた地域は住宅街を形成し、クラトンの南と西の地域及び町の中央を南北に流れるチョデ川 (Tjode) 周辺地域は、カンポン (kampung) が密集している。町は、ことに住宅街は緑と花にみち溢れ、それは実にかがやかしく美しい。

ジョクジャカルタの朝は小鳥の鳴き声とともに始まる。町の人々は、たいてい朝5時から6時の間には起きて、水浴び (マンディ=mandi) と朝食を済ませる。いわゆる富裕な人々の家に雇用されている使用人 (たとえば私の下宿は、主人がスマトラのパレンバンの駅長で、留守宅に夫人と6人の子供がいるが、ここでは、料理人の老婆が1人、洗濯を主とする30代の子供連れの女が1人、さまざまな雑用をする少年が2人雇われている。彼らは、食事と寝台、年に1~2回衣服が与えられる。他は、月にせいぜい300~400ルピアの現金収入があるだけである。) は、家人よりも少なくとも1時間前には起きているようである。学校は朝7時から12時半頃まで、商店や官庁も8時から1時頃までである。午後は、ほぼ5時から8時半頃まで商店街が再び店を開いている。他に午後から夕方にかけて授業を行なっているいくつかの高等学校、大学もある。人々は、午後1時過ぎに昼食をすませて、2時間くらい昼寝をし、夕方再び水浴びをしてから7時すぎに夕食をとる。食事は、私の下宿先を例にとると白飯に野菜スープ、テンペ (tempe) と呼ばれる大豆を発酵させて作ったせんべい状のもの、時に塩魚か鶏の肉あるいは野菜料理、これらを、唐辛子をかじりながら食べるのである。しかし朝食は、タピオカ (tapioka) で作った代用食にお茶一杯位であり、町の多くの人々は朝食なしで済ませて

* 東京大学大学院(社会学研究科)

いる場合が多いという。使用人は家人の残り物を食べている。夕食後は近所の人々が集まってジャワ語のおしゃべりを続け、夜10時頃には、眠りについている。

先にも触れたように、商店街はマリオボロ通りに沿って発達している。私がきて以来、物価はほとんど安定を続け、米価—ジョクジャカルタで上等米1キロ35ルピア、普通米で25ルピアくらい—は、やや下り気味である。それに呼応してか、ドル＝ルピアの交換レートも3カ月間にジョクジャカルタで3回にわたって変わり、1ドル400ルピアから370ルピアにまで落ちた。奇妙なことに、ジャカルタとジョクジャカルタでは、交換レートが異なっており、ここでは常に、ジャカルタよりも1ドルにつき10ルピアほど低くなっている。これについては、「ここは、ジャカルタよりも物価が安いから」という説明しか与えられていない。私は、先に述べた民家の一部屋を借り、朝はパン食、昼と夜は別に中華風の料理を一品作ってもらい、家族とともに食事をしているが、食事代、部屋代一切含めて1月10,000ルピア支払っている。ジョクジャカルタへ遊学しているインドネシア人学生の場合は、普通で3,000ルピア前後、せいぜい5,000ルピアが本代、下宿代として必要な金額のようである。

マリオボロ通りで商店を営んでいるのはそのほとんどが、インドネシア国籍を取得している中国人であると言われているが、通りの両側にはぼ300軒からある商店には、われわれ外国人にとっても必要な品物（たとえばトイレットペーパー）を含めて、生活必需品はほとんどすべて揃っている。ただし、香港及び中国本土からの輸入製品を除いた輸入品はいずれも高価で、ことに日本製の繊維製品、化粧品、電気製品（テレビ、トランジスタ・ラジオ、冷蔵庫も並んでいる）の物価は日本の1.5～3倍くらいしている。ジョクジャカ

ルタの人々が常用している衣服、石けん、自転車（自転車は通勤、通学のもっとも主要な手段で、朝と夕方は町中に自転車が溢れ、その数は40,000～50,000台と言われている）などは、その多くが、香港、中国からの輸入品で、店頭価格は日本製品の約4分の1くらいであるが、これととも、町の人々の現金収入の低さと、米価の安さから考えると決して安価とはいえないように思われる。

町とインドネシア各地を結びつけているのは、週3回、ジャカルタージョクジャカルタースラバヤードンパッサルを連絡している飛行機、1日1回スラバヤージakarta間を走っている前記のビーマ号とバンドン経由ジャカルタ行き、スマラン行き等の鉄道、午後出発して翌朝ジャカルタに着く夜間急行バスがあり、近郊の諸地域にはバスが出ている。さらに、アンドン(Andong)と呼ばれる四輪馬車は、時に2頭立て、普通は1頭立てで、やはりジョクジャカルタの町とその近郊とを結びつけているが、馬の首につけられた鈴の音に風情が感じられる。近郊のデサ(des)から町へ農産物を運ぶのには、白牛が使われている。この牛車はグロバック(gerobak)と呼ばれる。アndonは、また、市内各地を結ぶ交通手段として、独立前までは自転車と並んでもっとも重要な役割を果たしていたという。しかし独立後、町の人々にもっとも親しまれてきた交通機関は、ベチャ(betjak)と呼ばれる自転車の前に乗客用の座席をしつらえた三輪人力車で、ジョクジャカルタだけでもその数は2,000台を下らない。ベチャは新車で1台30,000～40,000ルピア(ちなみに自転車の新車が9,000～14,000ルピア)の価格であると言われているが、自家用のベチャで経営している者はほとんどなく、彼らは主として中国人の所有者から、1日(24時間)150ルピア、半日75ルピアでベチャを賃借りし、距離、道路の状態、乗客数に応じて

10～50 ルピア で市内の 各所を 結びつけるのである。これが結局市内バス、市電のかわりをつとめている。時には、大人を3名くらい乗せて走るベチャも見受けられ、差し引きした平均収入は1日50～100ルピア位と言われているが、彼らは組合も持たず、熱帯でのその労働は厳しく、したがって労働寿命も短く胸を病む者が多いという。私自身は、自転車を購入してこれを愛用しているがたいへん便利である。

日本で聞かされていたジャワの暑さは、今まで雨期が続いていたせいかな、それほど耐えがたいものではない。それにしても、私の部屋に備えた寒暖計は、朝8時から夜12時すぎまで、28度と31度の間を往復している。しかし、夜の戸外は風が涼しい。雨期にはほとんど毎日午後から夕方にかけてスコールがくる。日本の夏のように雄壮な積乱雲がいきなり空をおおうというのではなく、午前中にところどころ出ていた雲が、午後には静かに空一面をおおい、やがて風がひととき吹きわたるとともに、すさまじい勢いで雨粒が落ちてくる。ほぼ2時間か3時間、この豪雨が続くのである。時には1日中、細かい雨が降り続くこともある。太陽は垂直に落下し黄昏の余情は感じられないが、午後から夜に変わりゆくほんのひととき、切れ残りの雨雲が赤黒く染まる頃、町にはイスラムの祈りの声が、高く張りつめた調子で響きわたる。それがこの町の一日のうち、唯一の緊張した時間のように思われる。

惜しみなく降り注ぐ雨は、しかしながら、エネルギー源として有効に利用されてはいない。水道は、雨期の住宅街ですら、夜間と昼間1～2時間、ちょろちょろと出る程度であり、こちらの人々もこの「水道」の水は一度わかしてから飲むのである。停電は今までに二、三回経験しただけであるが、カンボンのほとんどは電気が入っておらず、石油ランプ

が使われている。付近のデサでも事情は同じである。結局、インドネシアで近代文明の恩恵を享受し、また享受しうるのは、都市のごく一部の地域と人々に限られ、その「都市」ですら都市としての基本的な機能を果たしていないように感じられる。同じことが、この国の膨大な「官僚群」についても言えるように思う。この国の主要な就職先として、実に多くの役人を抱えたまま、近代的官僚制の役割をほとんど果たしていないのが、この国の役所仕事の現状ではないだろうか。私自身のいくつかの体験からにすぎないが、そう感じられる。

ジャワの夜は暗い。街の夜もネオンサインに飾られるということはない。雨に降りこめられてマリオボロの大通りに立ちつくす夜など、昔ながらの白壁やわずか1メートルたらず道路に向かって張り出されたひさしの下で、身にまとった1枚の布切れで雨露と寒さをしのぎながら眠りにについている家なき民（彼らはデサやカンボンから行商にきたまま街で夜をすごす者か、あるいは純然たる乞食）を見ていると、ふいに芥川竜之介の「羅生門」が思い出されたりする。しかし晴れた夜は、ほとんど北天近い頭上で、オリオン座がかがやく。そのきらめきは凜冽そのものである。やがて乾期に入り、日本に夏が訪れる頃、さそり座や射手座はさらにどれほどきびしくひかりかがやくことであろうか。それをみつめるのが待ち遠しい気持である。

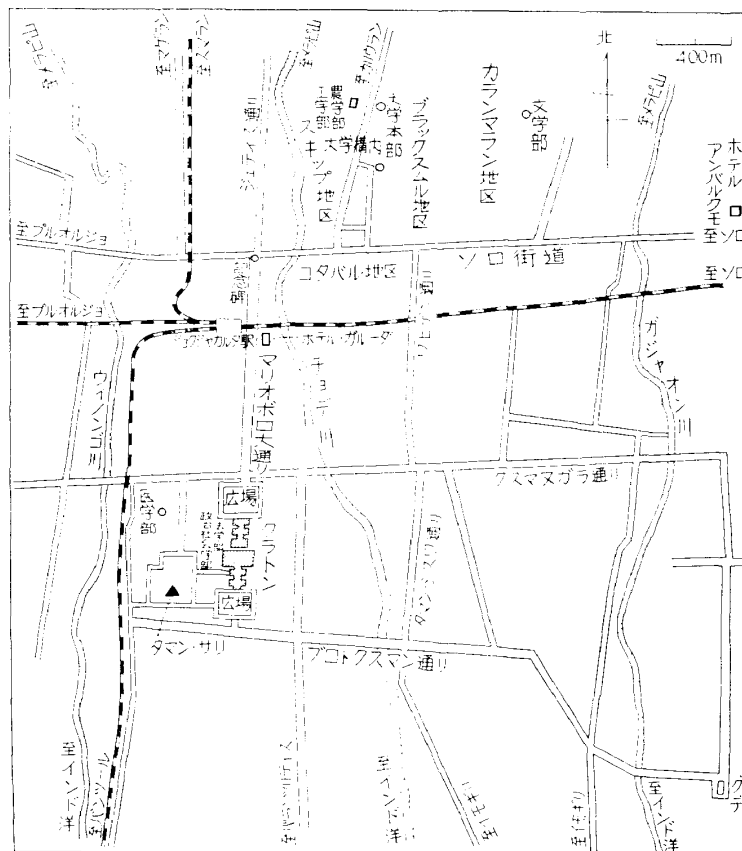
ガジャマダ大学——とくに 文学部歴史学科について——

「歴史の都」「学術の府」ジョクジャカルタには回教系及びカソリック系のいくつかの私立大学があるが、この町のみならず、ジャカルタにあるインドネシア大学と並んで、この国のもっとも代表的な教育研究機関の中心は、いうまでもなく国立ガジャマダ大学(Uni-

versitas Gadjah Mada)である。ガジャマダ大学は、1946年3月3日に創立され、1949年12月19日以来、国立大学となった。ガジャマダの名は、かつて東中部ジャワを中心に強大な王権を築いたマジャパヒト王国(Madjapahit, 1293~1521)を隆盛に導いた名臣、ガジャマダ(Gadjah Mada 1300?~1364)にちなんだものである。現在学生数、学部数ともにインドネシア大学を凌ぎ、地域別出身についての統計をもたないが、アチェから西イリアンまで、全インドネシアから学生が集まっている。私がジョクジャカルタに着いて以来、大学は学年末の長い休みに入っており、ようやく3月中旬から講義が始まる予定で、大学についての詳しい記述はできないが、いままでに入手できたいくつかの資料をもとにしながら、私が聴講生として籍をおいている文学部――

正確には文学文化学部――歴史学科を中心に、その現況を紹介してみたい。

ガジャマダ大学には、現在、法学部(Fakultas Hukum)、経済学部(Ekonomi)、政治社会学部(Sosial dan Politik)、文学文化学部(Sastra dan Kebudayaan)、心理学部(Psychologi)、哲学部(Filsafat, 本年度より新設)、医学部(Kedokteran Umum)、歯学部(Kedokteran Gigi)、工学部(Technik)、薬学部(Farmasi)、獣医畜産学部(Kedokteran Hewan dan Peternakan)、理学部(Ilmu Pasti dan Alam)、生物学部(Biologi)、農学部(Pertanian)、農業工学部(Technologi Pertanian)、林産学部(Kehutanan)および地学部(Geografi)の17学部があり、学長には1968年12月以来まだ30代のスロン(Soeroso)氏が就任している。学生総数は



ジョクジャカルタ市街略図

1968年12月31日現在、新入生を含めて、男11,538名、女3,617名、合計15,155名である。学部別学生数の内訳は表1の通りである。また、付属研究機関を含む教職員数は同じく昨年末現在で5,601名、その内訳は表2の通りであるが、専任教授はわずか48名、学生300余名に1人となっている。

17学部のうち、法学部、政治社会学部にはクラトンの一角が使用され、医学部、獣医学部、歯学部は市中央にあるが、それ以外の諸学部はソロ街道の北側、市の郊外にあたるブラックスモール (Bulaksumur)、スキップ (Skip)、カランマラン (Karang Malang) の諸地域に散在している大学本部はブラックスモールにある経済学部内におかれている。また、工学部、経済学部、法学部の3学部はジョクジャカルタの北北西約40キロにあるマゲ

ラン市 (Magelang) に分校をもっている。

ブラックスモールおよびスキップ地区は田畑を切り開いて作った住宅街であり、キャンパス周辺には大学関係者の住宅が多い。ここから北方は中ジャワの雄大な活火山メラピ山 (Gunung Merapi, 2,911m) の裾野につらなり、田畑とやし樹が緑一色でひろがっている。カランマラン地区には田畑に囲まれて平屋建ての校舎が4棟だけぽつんと建っており、このうち2棟が薬学部、あとの2棟が文学文化学部 (以下文学部と略称) として使用されている。文学部の1棟は研究室 (教授用の個室はなく、学科別の一つずつ研究室がある。)、図書室、事務室に充てられ、他の1棟が教室として使用されているが、その不足はおおうべくもない。

文学部は文学科として、イギリス文学科

表1 ガジャマダ大学学部別学生数

1968年12月31日現在

学部名	新入生			在学学生			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
法学部	156	106	262	1576	637	2204	1723	743	2466
経済学部	206	93	299	1476	297	1773	1682	390	2072
政治社会学部	212	95	307	1250	424	1674	1462	519	1981
文学文化学部	62	73	135	408	291	699	470	364	834
心理学部	83	48	131	174	94	268	257	142	399
哲学部	90	7	97				90	7	97
医学部	117	37	154	854	154	1008	971	191	1162
歯学部	32	33	65	155	116	271	187	149	336
獣医畜産学部	108	42	150	260	58	318	368	100	468
薬学部	52	45	97	241	253	494	293	298	591
工学部	175	21	196	1473	151	1624	1648	172	1820
理学部	51	20	71	317	52	369	368	72	440
生物学部	40	34	74	81	77	158	121	111	232
農学部	146	25	171	536	65	601	682	90	772
農業工学部	72	42	114	218	97	315	290	139	429
林産学部	99	5	104	311	14	325	410	19	429
地学部	78	24	102	438	87	525	516	111	627
合計	1779	750	2529	9759	2867	12626	11538	3617	15155*

* マゲラン分校の学生数を含まない。

(付) 1969年度新学年は本年2月より開始、入学試験は昨年末に実施された。

表 2 ガジャマダ大学教職員一覧

1968年12月31日現在

学 部 及 び 付 属 機 関	教 官 ¹⁾														小 計		職 員 計	合 計	
	教 授		教 授 待 遇		助 教 授		講 師		準 講 師		助 手		準 助 手		副 手				
	T ²⁾	LB ³⁾	T	LB	T	LB	T	LB	T	LB	T	LB	T	LB	LB	T			LB
法 学 部	3	3	2		2		8	4	2		10	7	1		2	28	16	91	135
経 済 学 部	2	1			4	1	22	2	6	6	4	8	6	3	18	44	39	47	130
政 治 社 会 学 部	4	7			1	7	15	17	3	11	9	16	4	2	4	36	64	84	184
文 学 文 化 学 部	4	6			4	13	6	24	5	9	10	2	11	9	9	40	72	47	159
心 理 学 部		3			3	5	3	3	2	5	7	2		1	14	15	33	31	79
哲 学 部		1				4		3		6		1					15		15
医 学 部	12	2	1		11	8	15	9	13	7	93	24	28	9	83	173	142	235	550
歯 学 部	1	8		2	4	3	6	11	2	13	15	66	1	19	110	29	237	51	317
獣 医 畜 産 学 部	3	7			2	3	20	15	12	9	10	12	3	13	75	50	139	124	313
薬 学 部		7		1	2	6	12	9	3	13	6	28	1	38	103	24	205	66	295
工 学 部	7	7			7	7	13	25	8	24	14	20	7	14	188	56	285	158	499
理 学 部	4				2	4	14	4	13	8	2	6	10	2	57	45	81	121	247
生 物 学 部	2	3			2	6	4	4	2	6	7	13	16	6	75	33	113	65	211
農 学 部	3	13			5	4	13	22	11	2	19	16	24	13	18	75	88	173	336
農 業 工 学 部	2	8				7	3	17	3	12	7	15	5	12	51	20	122	46	188
林 産 学 部		4			1	6	8	13	2	9	2	9	9	22	57	22	114	52	188
地 学 部		4			3	2	1	3	6	4	7	6	20	14	10	37	43	23	103
B.P.K.K.C. ⁴⁾		3			2	6	1	9	7	9					81	10	118	31	159
B.P.A. ⁵⁾							5	5		3			1			6	8	30	44
B.P.M. ⁶⁾		1									4		5			9	1	21	31
本 部 事 務	1															1		1313	1314
マゲラン分校		6		2		3	1	40		13	8	5	2	7		11	76	17	104
合 計	48	94	3	5	55	105	170	249	100	169	234	256	154	184	949	764	2011	2826	5601

(注)

1) それぞれの役職名は次の通りである。

教授 = Guru Besar

教授待遇 = Pegawai Tinggi Golongan F/VI

助教授 = Lektor Kepala

講師 = Lektor

準講師 = Lektor Muda

助手 = Asisten Ahli

準助手 = Asisten

副手(学生副手) = Mahasiswa Pembantu (学生の中から採用されるもの)

2) T = Tetap 専任

3) LB = Luar Biasa 非常勤(他学部からの出向が多い)

4) B.P.K.K.C. = Biro Pembina Kuliah Kuliah Khusus 特別講義(パンチャ・シラ, 宗教等)作成事務局

5) B.P.A. = Balai Pembinaan Administrasi 行政運営事務局

6) B.P.M. = Biro Pengabdian Masyarakat 社会的奉仕事務局

(Djurusana Sastera Inggris), フランス 文学
科 (Sastera Perantjis), アラブ文学科 (Sa-
stera Arap), インドネシア文学科 (Sastera
Indonesia), 島嶼語文学科 (Sastera Nusan-
tara) の5学科, 文化学科として, 歴史学科
(Djurusana Sedjarah), 文化人類学科 (Anthro-
pologi Budaja), 古代史学科 (Purbakara dan

Sedjarah Kuno Indonesia) の3学科, 計8
学科よりなり, 昨年末の学生総数834名の学
科別学年別内訳は表3の通りである。

インドネシアの大学制度は5年制であり,
3年を修了すると学士 (Sardjana Muda), 5
年を修了すると修士 (Sardjana) の称号が与
えられる。修士号取得のためには試験と論文

表3 ガジャマダ大学文学文化学部学科別学年別学生数 1968年12月31日現在

学科名		第1学年			第2学年			第3学年			第4学年			第5学年			合計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
イギリス 文学科	新	9	24	33												9	24	33	
	在	6	9	15	8	16	24	12	22	34	24	17	41	3	17	20	53	81	134
	計	15	33	48	8	16	24	12	22	34	24	17	41	3	17	20	62	105	167
フランス 文学科	新	3	14	17												3	14	17	
	在	1	3	4	4	9	13									5	12	17	
	計	4	17	21	4	9	13									8	26	34	
アラブ文学科	新	3	1	4												3	1	4	
	在	1		1	7	2	9	7	2	9	10		10			25	4	29	
	計	4	1	5	7	2	9	7	2	9	10		10			28	5	33	
インドネシア 文学科	新	16	5	21												16	5	21	
	在	4	1	5	12	11	23	23	18	41	17	5	22	11	11	22	67	46	113
	計	20	6	26	12	11	23	23	18	41	17	5	22	11	11	22	83	51	134
島嶼語 文学科*	新	4	2	6												4	2	6	
	在	3		3	2		2	2		2	1		1	3	2	5	11	3	14
	計	7	2	9	2		2	2		2	1		1	3	2	5	15	5	20
歴史学科	新	15	2	17												15	2	17	
	在	17	7	24	44	12	56	27	20	47	17		17	36	13	49	141	51	192
	計	32	9	41	44	12	56	27	20	47	17		17	36	13	49	156	53	209
文化人類学科	新	9	25	34				1		1						10	25	35	
	在	13		13	28	22	50	26	42	68	4	1	5			71	65	136	
	計	22	25	47	28	22	50	27	42	69	4	1	5			81	90	171	
古代史学科	新	2		2												2		2	
	在	1	1	2	11	8	19	10	15	25	13	5	18			35	29	64	
	計	3	1	4	11	8	19	10	15	25	13	5	18			37	29	66	
合計	新	61	73	134				1		1						62	73	135	
	在	46	21	67	116	80	196	107	118	225	86	29	115	53	43	96	408	291	699
	計	107	94	201	116	80	196	108	118	226	86	29	115	53	43	96	470	364	834

* 島嶼語文学科は, インドネシア各地の種族語 (Bahasa Daerah), 種族文学を専攻するもの。

に合格しなければならない。博士課程は制度として存在しないが、この国での博士号は大学ごとに設けられた審査委員会によって与えられる。その数は少なく、すでに大学の講師、助教授になっている者が取得するのが普通であり、教授は他学部あるいは他大学の博士号のみを取得しようとのことである。ガジヤマダ大学では現在までに、医学博士、獣医学博士、法学博士、農学博士、心理学博士がそれぞれ1名ずつ生まれただけで、外国の諸大学から博士号を取得した教授のほうが多くなっている。

文学部歴史学科は、1年を一般教養として費やし、2年からインドネシア史と西洋史に分かれる。これらの講義内容を昨年度のものについて一覧すると表4の通りである。

歴史学科の教授陣は、教授 (Guru Besar) 1名、講師 (Lektor) 3名、準講師 (Lektor Muda) 2名、助手 (Asisten Ahli) 3名よりなり、この他に、非常勤 (他学部からの出向が多い) として教授2、講師5、準講師3、助手2名よりなっている。(1968年)

歴史学科主任教授のサルトノ (Prof. Dr. Sartono Kartodirdjo) は、1956年にインドネシア大学からこの国で独立後初めて歴史学の分野で修士号を取得、後アメリカ (イェール大学、シカゴ大学) とオランダに学び1966年にバンテン農民反乱の研究 (*The Peasants' Revolt of Banten in 1888*) でアムステルダム大学から博士号を授与された学者で、現在インドネシア歴史学界の最高峰と目されている。教授は今年3月より9月までシンガポール大学に招かれて現在不在であるが、その学究的な態度と穏やかな人柄とがあいまって、歴史学科の若い学徒達から絶大な信頼を得ているように思われる。サルトノ教授は昨年度インドネシア史のセミナーと歴史理論、歴史学方法論の講義を受けもっていた。

サルトノ教授はインドネシア大学の出身で

あるが、現在講師陣、助手陣のほとんどはガジヤマダ大学歴史学科の出身者で占められている。それらの顔ぶれをみると、ジョコ・スキマン (Drs. Djoko Soekiman, ジャワにおけるオランダ建築史の論文で1963年修士号取得、文化史担当)、スダルソノ (Drs. R. N. Soedarsono, 空想的社会主義の論文で1962年修士号取得、西洋史、西洋文化史担当)、イブラヒム (Drs. T. Ibrahim Alfian, アチュエの年代記に関する論文で1964年修士号取得、歴史学セミナー担当)、ダルモノ (Drs. Dharmono, 19世紀ジャワの強制賦役労務省に関する論文で1966年修士号取得、インドネシア近代史担当)、スハルトノ (Drs. Soehartono, 日本軍政下の中央参議院に関する論文で1966年修士号取得、インドネシア近代史、民族運動史担当)、スケシ (Dra Soekesi Soematmodjo, タマン・シスワ運動に関する論文で1966年修士号取得、インドネシア現代史、民族運動史担当) などがあげられる。

文学部8学科から修士号を取得して卒業した学生は、1957年から1967年末までで144名である。文学部が現在の形で設置されたのは1955年であるが、これら144名の修士数は文学部全体の学生数と比較するとかなり少ない。文学部学生の多くが、3年修了とともに大学を去ること、それに論文作成のための時間と費用とが容易にはつくれないことがその理由としてあげられよう。

歴史学科についてみると上記期間 (正確には1961年～1967年) に修士号を得た者は42名である。これら42の論文について、私はその題目をみるだけであり、内容について現在のところ知りえないが、その題目に従って地域と時代に関して大まかな分類をし、その一覧を掲げてみると表5の通りである。これで見るとインドネシア史関係が圧倒的に多く、とくに65年以降は、インドネシア近・現代史、民族運動史関係の論文が著増しているのが目

表 4 文 学 部 歴 史 学 科

<p>第1学年</p> <p>基礎必修 (Dasar)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. パンチャ・シラ 2. 宗 教 <p>必 修 (Baku)</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. インドネシア史入門 4. 西洋史入門 5. アジア史入門 <p>選択必修 (Pelengkap)</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. イスラム学 7. 図書館学 8. 社会学入門 <p>語 学 (Pembantu)</p> <ol style="list-style-type: none"> 9. インドネシア語 10. 英 語 11. オランダ語 12. ドイツ語・フランス語 <p>第2学年 A. インドネシア地域</p> <p>基礎必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 宗 教 <p>必 修</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. インドネシア古代・中世史 (Sedjarah Indonesia Lama) 3. インドネシア史史料 4. 歴史学方法論入門 5. インドネシア近代史 (Sedjarah Indonesia Baru XVI~XVIII) <p>選択必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. インドネシア古代・中世文化史 7. インドネシア共和国の国家組織 (Tatanegara) 8. 史料批判 (Kartografi) 9. マレー古代, ジャワの国家構造 <p>語 学</p> <ol style="list-style-type: none"> 10. オランダ語 <p>第2学年 B. 西洋地域</p> <p>基礎必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 宗 教 	<p>必 修</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. 中近東近・現代史 3. 歴史学方法論入門 4. 西洋近代史 (16~18世紀) 5. インドネシア近代史 (16~18世紀) <p>選択必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. インドネシア古代・中世文化史 7. 経済史 8. 国家思想史 (Sedjarah Kemikiran Kenegaraan) 9. ギリシャ・ローマ文化史 10. 史料批判 <p>語 学</p> <ol style="list-style-type: none"> 11. ドイツ語, フランス語 <p>第3学年 A. インドネシア地域</p> <p>必 修</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. インドネシア近・現代史 (Sedjarah Indonesia Baru XIX~XX) 2. 植民地主義・帝国主義 3. 歴史記述の技法 (Teknik Penulisan Sedjarah) 4. 民族運動史 5. 東南アジア史 6. 西洋近・現代史 (19~20世紀) <p>選択必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 7. インドネシア近代文化史 <p>語 学</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. オランダ語 9. マレー語, ジャワ語史料 <p>第3学年 B. 西洋地域</p> <p>必 修</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 植民地主義・帝国主義史 2. インドネシア近・現代史 (19~20世紀) 3. 歴史記述の技法 4. 民族運動史 5. 西洋近・現代史 (19~20世紀) <p>選択必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 西洋近・現代文化史
---	--

講義題目一覧 (1968年)

7. ルネサンス文化史	3. 歴史哲学
8. イスラム文化史	4. 歴史学方法論
9. インドネシア近・現代文化史	選択必修
語学	5. 外交史
10. ドイツ語, フランス語	6. 選択 (Aコースと同内容)
第4学年 A. インドネシア地域	語学
必修	7. ドイツ語, フランス語
1. インドネシア近・現代史セミナー	第5学年 A. インドネシア地域
2. 歴史哲学	必修
3. 歴史学方法論	1. 近・現代インドネシア史文献講読
選択必修	2. 歴史哲学
4. 文化人類学	3. 歴史学方法論
5. 選択	選択必修
a. 東洋美術史	4. 文化人類学
b. 西洋美術史	5. 選択 (第4学年の選択と同内容)
c. アフリカ史	論文
d. 西洋史文献講読	第5学年 B. 西洋地域
e. 東南アジア史	必修
f. 社会学	1. 西洋史文献講読
6. オランダ語	2. 歴史哲学
7. 種族語文献講読	3. 歴史学方法論
第4学年 B. 西洋地域	選択必修
必修	4. 選択 (第4学年の選択と同内容)
1. 西洋史セミナー	論文
2. インドネシア近・現代史セミナー	

(注) 各課目の時間数は、いずれも1週2時間

立つ。日本関係の論文が多いのも注目される。歴史学科について修士号取得の時期を年齢別にみると、25才～30才 18名、31才～35才 16名、36～40才 6名、41～50才 2名となっていて、修士号取得の年齢が高いことに気がつく。文学部の他学科についても事情は同じである。総じていえば、これはこの国の研究条件の厳しさを反映しているものと言えよう。例えば、「洋書」は日本で購入する場合より安価とは言え、1冊 2,000～3,000 ルピアはしており、しかもインドネシア史関係の「洋

書」はほとんど店頭で見当たらない。ガジャマダ大学の教授クラスで月給が9,000～10,000 ルピア、助手は2,500 ルピア前後とのことで、いわんや定収入のない奨学金制度もない学生にとっては、本の購入すら思うにまかせないようである。インドネシア史関係の史料にしても、ほとんどジャカルタの博物館か国立文書館に眠っており、マイクロフィルム、ゼロックスの設備もない現状での研究は、多くの困難を抱えていると言えよう。

こうした現状で、なおかつ、若い歴史学徒

表 5 文 学 部 歴 史 学 科 修

-
- I-a. インドネシア (19世紀末までを扱ったもの)
1. ハマンクブオノ 1 世の建築様式 (1961年 4 月修士号取得)
Hamangkubuwona I dengan Seni Bangunan
 2. プラオサン寺院 (1962年 6 月) Tjandi Plaosan
 3. イジョ寺院 (1962年 6 月) Tjandi Idjo
 4. バタビアのシナ人反乱 (1962年 8 月) Geger Patjina
 5. ディポネゴロ戦争 (1962年 8 月) Perang Dipanegara
 6. ジャワとくにジャカルタにおけるオランダの建築様式史 (1963年 7 月)
Sedjarah Seni Bangunan Belanda di Djawa, Khususnja Djakarta
 7. 社会的宗教的側面よりみたるミナンカバウのパドリ戦争 (1964年 1 月)
Perang Paderi di Minangkabau, tindjauan dari segi sosial-religius
 8. 17世紀中葉のパレンバン——パレンバンとその周辺における胡淑貿易政策に関する歴史的
分析 (1964年 4 月)
Palembang Pertengahan Pertama Abad ke-17, sebuah analisa historis tentang
keadaan politik perdagangan lada didaerah Palembang dan sekitarnja
 9. 17世紀インドネシアにおける胡淑貿易 (1964年 5 月)
Perdagangan lada di Indonesia Abad ke-17
 10. アチェパサイの諸年代記に関する歴史的一考察 (1964年 6 月)
Sebuah Tindjauan Sedjarah tentang Hikajat Radja² Pasai
 11. 19世紀ジャワにおけるブパティ衰退の初期様相 (1964年 7 月)
Kemunduran keduluan Bupati² di Djawa pada abad ke-19
 12. パシル年代記の神話的, 歴史的諸要素の分析 (1964年 9 月)
Analisa tentang Unsur² Mitis dan Sedjarah² Babad Pasir
 13. バタック地方のキリスト教 (1965年 3 月) Agama Kristen di Tanah Batak
 14. フェン・ヘイツと1898年の政府令 (1966年 5 月)
Van Heutsz dan Peraturan Pemerintah Tahun 1898
 15. 18世紀における通商路としてのマカッサル (1966年 6 月)
Makasar sebagai Bandar Dagang pada Abad ke-18
 16. ジャワ賤民の諸内容 (1966年 7 月) Beberapa Hal tentang Orang Kalang
 17. 19世紀ジャワの強制賦役労働(者)の問題 (1966年 9 月)
Masalah Rodi di Djawa pada Abad ke-19
 18. スルタン・アグンのバタビア攻撃 (1967年 9 月) Serangan Sultan Agung Batavia
- I-b. インドネシア (20世紀以降を扱ったもの)
1. モハマディヤ設立の経緯 (1964年 1 月)
Sedjarah Sekitar Berdirinja Muhammadiyah
 2. バリ島南部の虐殺 (1964年 2 月) Puputan Badung
 3. ジャワにおける外国民間資本の定着と民族覚醒に及ぼしたその影響 (1966年 1 月)
Penanaman Modal Swasta Asing di Djawa Serta Pengaruhnja terhadap
Kesadaran Nasional
-

士 論 文 題 目 一 覧 (1961年～1968年)

4. インドネシアにおけるコーディアン派アフマディヤ (1966年2月)
Ahmadiyah Qadian di Indonesia
 5. とくに中央参議院との関連よりみたるインドネシア民族主義 (1966年5月)
Nasionalisme Indonesia, Khusus ditinjau hubungannya dengan Tjua Sangiin
 6. 民族運動の一側面たるタマンシスワ (1966年5月)
Tamansiswa adalah salah satu aspek dari Pergerakan Nasional
 7. 南スラウェシマリノ反乱との対決 (1966年7月) Konfrontasi Kita terhadap Malino
- II. アジア・アフリカ
1. アルジェリア革命 (1964年9月) Revolusi Aljezair
 2. インド独立運動 (1965年9月) Menuju Kemerdekaan India
 3. 19世紀中期における日本の近代化 (1966年6月)
Modernisasi Djepang pada pertengahan abad ke-19
 4. 日本におけるデモクラシーの発展 (1966年10月)
Perkembangan Demokrasi di Djepang
- III. ヨーロッパ・アメリカ
1. 西ヨーロッパの民族主義と民族運動 (1848年のフランス革命より) (1962年1月)
Nationalism and National Movement in Western Europe (From the French Revolution to 1848)
 2. 空想的社会主義 (1962年10月) Sosialisme Utopia
 3. アメリカ南北戦争におけるアブラハム・リンカーンの役割 (1963年7月)
Peranan Abrahm Lincoln dalam Perang Saudara di Amerika Sarikat (1861～1865)
 4. フランスの民族主義 (1965年3月) Nasionalisme Perantjis
 5. ドイツナチス権力の発生 (1965年9月) Tumbuhnja Kekuasaan Naziisme Djerman
 6. アドルフ・ヒトラー、独裁者となったその諸要因 (1966年7月)
Adolf Hitler, faktor² jang mendorong untuk mendjadi seorang diktator di Djerman
- IV. 国 際 関 係
1. ケープカイロ——近代イギリス帝国主義とアフリカにおけるその政策の特質に関する一研究—— (1963年6月)
Cape Cairo, sebuah studi tentang imperialisme modern Inggris dan Pelaksanaan tjita-tjitanja, di Afrika
 2. 政治的背景よりみたる19世紀初頭の東方問題 (1963年7月)
Persoalan Timur dalam abad ke-19 bagian Pertama, tindjauan latar belakang politik
 3. 1945年～1949年の冷たい戦争 (1965年2月) Perang Dingin di Djerman 1945～1949
 4. 第二次大戦後の日本においてアメリカ合衆国の果たした経済的社会的役割 (1965年2月)
Peranan Amerika Sarikat di Djepang dalam Ekonomi dan Sosial sesudah Perang Dunia II

表5 つづき

-
5. 1956年のスエズ危機——イギリス支配維持の失敗—— (1966年1月)
Krisis Suez 1956, salah satu Kegagalan Inggris dalam usahanya mempertahankan dominasinya
 6. ベトナムにおけるフランス植民地化の終末 (1966年7年)
Berakhirnya Koloniasasi Perantjis di Vietnam
 7. パレスチナ分割をめぐって——パレスチナにおけるシオニズムとアラブ民族主義に関する一断面—— (1966年10月)
Menuju Pembagian Palestina (Suatu Pembagian tentang pergerakan Zionisme versus Nasionalisme Arab di Palestina)
-

たちが個人的なレベルではあってもねばり強い努力で研究を続けているのは、インドネシア史の再構築、即ち、インドネシア民族史を確立するという責任と自負とに支えられているからであろう。

このインドネシア民族史確立の問題は1945年の独立以後、たんにインドネシアの歴史学者のみならず、この国の民族指導者たちにとっても当然重要な問題となっていたわけで、1957年12月にガジャマダ大学で第1回全国歴史学セミナーが開催された時、そこでの主要なテーマもこの問題に絞られていた。このセミナーとここで取り上げられた民族史確立のころみについては、永積昭教授が「オランダ植民史観とインドネシア・ナショナリズム」(『アジア研究』14巻3号、アジア政経学会刊、昭和43年10月、pp. 15~30)の中で詳しく紹介しておられるが、現在のインドネシア史学界は12年前のセミナーで提起された諸問題といまなお取り組んでいるといえよう。そこで最後に、この文学部歴史学科に限って、この問題について触れてみたい。

インドネシア史をインドネシア人の手によって新たに書き直すという場合、それはオランダの学者が見出しえなかった新たな史料をとくに地方史について発掘すること、あるいは数多くの年代記を新たに読み直すことで

年代記の背後にある土着社会の文化に肉薄すること、このような作業とならんで(関連して)何よりもまず、歴史解釈の主体の問題、具体的には、民族自体の立場からしてどのような時代区分がインドネシア史についてなされるべきかという問題として、現在の歴史学者に意識されているようである。

例えば、歴史学科主任教授サルトノを編集主任としてこの歴史学科から1967年12月に第1号が刊行された『歴史学誌』(Lembaran Sedjarah)は、1968年8月に第2号、1968年12月に第3号(1号1,000部ずつ発行)がひき続いて出されたが、その刊行の辞の中で、現在、歴史学一般とくにインドネシア史学を学ぶ学生のためのテキストの乏しきにかんがみて、これらの高等教育におけるインドネシア史のテキストとして使用可能な高度の歴史論文を掲載していくこと、そのために、翻訳ものではなく第1次史料にもとづいて作られたかきおろしの論文を掲載していくという抱負がうたわれており、特に第2号、第3号ではサルトノ教授自ら筆を執ってインドネシア史学の当面する諸問題に触れている。

ここでは第3号に載せた論文、「インドネシア史料の構造的側面」(Segi-segi Struktural Historiografi Indonesia)についてそのアウトラインを紹介してみたい。サルトノはまず、

時代区分の仕方が歴史家の立場と観点とをそのまま反映するものであることを述べたあとで、直接インドネシア史の時代区分の問題に触れ、従来オランダの歴史学者によって記述されてきたインドネシア史が完全に西欧中心、とくにオランダ中心の史観にもとづいており、「インドネシア史」という場合、それはたかだか、オランダ東印度会社の発展史かあるいは、オランダ民族の海外発展史にすぎないこと、従ってこのような史観は、彼らによってなされたインドネシア史の時代区分の仕方にそのまま反映されていることを、スターペル (Stapel)、フレッケ (Vlekke)、デ・グラーフ (de Graaf) の通史を取り上げて明らかにしている。すなわち、彼らがインドネシア史の時代区分を行なうとき、それはそのまま、東印度会社の盛衰史、あるいはオランダ植民地政策の変遷史と重なり合っており、インドネシア地域自体のさらに複雑で主体的な社会変動についてはほとんど無視されてきたことを強調している。例えば1500年前後からインドネシア近代史 (Sedjarah Indonesia Baru) が始まるという場合、それはこの地域にこの時期にヨーロッパの文物が到来したことによってひきおこされたのでは決してなく、東南アジア海洋地域におけるイスラム発展史、マラッカを中心とする海路貿易の隆盛と推移、これらと関連してひきおこされていったモジャパヒト王国のゆるやかな崩壊過程等々のなかでこそ、はじめて意味づけられるべきものであると述べている。サルトノ教授は次にオランダ中心史観のもつこのような問題点は、オランダ東印度会社以来、オランダ人が行ってきた史料収集の方向と方法に由来するものであるとして、インドネシア史の史料の問題に触れている。教授によれば、インドネシア自体の年代記 (Babad または Sedjarah, Hikajat 類) が、多少なりともヨーロッパ人によって着目されるようになったのは、よう

やく19世紀に入って、イギリス人ラッフルズ (Thomas Stamford Raffles) が統治して以来のことであり、それもその後オランダ支配の復活とともに十分なされないか、あるいは収集しても、それにもとづいて歴史を記述する場合には結局オランダ中心史観の域を出ることがなかったという。したがって教授は、現在のインドネシア歴史家にとって必要なのは、歴史史料について新たな点検を行なうこと、とくに伝統的な年代記の中から歴史事実を読み取ることであると強調し、彼自身、インドネシア地域の年代記をいくつか取り上げて、その物語性を洗い落としつつ、その中に含まれている文化史的な諸史実とそれらの関連とを読み取っている。

ところでサルトノ教授がここで一貫して述べているインドネシア民族史の構築という問題は、より具体的には、新たな時代区分をインドネシア史について行なうことによって、インドネシア史の標準的な通史を記述すること、とくに高等学校用の標準的なインドネシア史の教科書を作成する問題に係わってくるようである。今年の2月12日から3日間にわたって開催された「ガジャマダ大学文学部卒業記念及び修士同窓会学術週間」(Pekan Kegiatan ilmiah, reuni sardjana dan wisuda Fakultas Sastra dan Kebudayaan Universitas Gadjah Mada) の際、2月12日夜、ジャカルタから招かれて記念講演を行なったヌグロホ・ノトスサント (Nugroho Notosusanto) が、この講演の中でとりわけ強調していたのも、まさにこのインドネシア民族史の通史作成の問題についてであった。現在、インドネシア大学文学部歴史学科で講師を勤めるかたわら、国軍史編纂委員会 (Lembaga Sedjarah Pertahanan Keamanan) の委員長の任にある若い歴史学者ヌグロホは、「インドネシアの歴史家とインドネシア史」(Sedjarawan Indonesia dan Sedjarah Indonesia) と題するこ

の講演において、インドネシア民族が、何よりもまず、一つの民族として生活していきたいという主体的な意識によって構成されていることを強調し、スリウィジャヤ (Sriwidjaja) 王国ともマジャパヒト王国とも質的に異なる強固な新たな民族国家インドネシア——それは、1945年の独立によって形成され、パンチャ・シラ (Pantja Sila) においてその民族のエトスを表明したとヌグロホは語っている——にふさわしい標準的なインドネシア史が、今こそ執筆されるべき時であり、それを行なうのがインドネシア史学者の責務であると述べていた。さらに彼は、この標準書の執筆こそ、1957年の第1回歴史学セミナーで提起されていた問題の一つの帰結であり、この執筆のために、ガジャマダ大学、インドネシア大学、バンドンのパジャジャラン大学 (Universitas Padjadjaran) の歴史学者たちによって構成された委員会による共同作業が有効な手段として考えられると述べ、さらにこの民族史編纂委員会発足のための出発点として、第2回歴史学セミナーが近々開催されるべきではないかと述べて、彼の講演を結んでいた。ヌグロホが提起している第2回歴史学セミナーの具体的構想については明らかにされてはいないが、このままでいけば来年中にもこのセミナーがジョクジャカルタで開催されるのではないかと、歴史学科の一講師は語っていた。

その場合、第1にいかなる時代区分が、いかなる史料を基礎にして、いかなる方法論において行なわれるのか、また第2にヌグロホ

が述べている歴史学者による共同作業 (共同執筆) の際には、もちろん徹底的な討論が前提とされなければならないが、それにしても個々の歴史学者の問題意識の相違は十分生かされるのか、すなわち、個々の歴史学者の研究の自由を保障することと、共同作業によって標準書を作成することとは、どのようにして両立しうるのか、結局官製の歴史が書かれるという恐れはないのか、さらにこれらの2点と関連して、サルトル教授自身がフェンルール (van Leur) を取り上げ、ルールが広く東南アジア史の中でインドネシア史を捉えようとしていたことを評価しつつ、被植民地地域の中でインドネシア史を比較考究する必要性に触れているが (サルトル教授前掲論文22～23ページ)、このような、いわば、インドネシア史自体を東南アジア、またアジア・アフリカの歴史の中で相対化する観点は十全に生かされていくであろうか、この相対化の契機として何がとりあげられるのであろうか、といった点については、インドネシア歴史学界の動向を追う場合の、私自身の一つの課題として考えていきたい。

付 記

本稿作成に当たって、タイプ刷りの資料「文学部便覧」1968年版を借して下さったイブラヒム講師の御好意に感謝する。

(1969年3月22日 ジョクジャカルタにて)